羽田空港増便と区民のくらし

羽田空港では2020年3月29日から、これまでにない新飛行コースでの新しい運用が始められました。都心や江戸川、荒川の人口密集地上空での低空飛行や、川崎の石油コンビナート上空の低空飛行です。騒音や落下物、万が一の事故、また大気汚染など多くの懸念から、都内各地の住民や川崎市民が早くから反対の声を上げてきましたが、コロナ禍で計画よりも大幅に少ない飛行になっている中でも、現実に飛行を体験する中でその懸念はますます大きくなっています。ここ大田区でも、羽田や大森南、京浜島など、騒音がくらしの支障になっています。たとえば「羽田空港増便問題を考える会」が昨年7月に羽田地区で実施した騒音影響アンケートには100通を超える回答が寄せられました。自由記述蘭で苦情を詳しく訴えた回答が多かったことも特徴です。騒音への怒りの広がりを如実に示す結果です。
このような現状から大田ネットワークは、この羽田空港の運用問題を生活展であらためて取り上げることにしました。

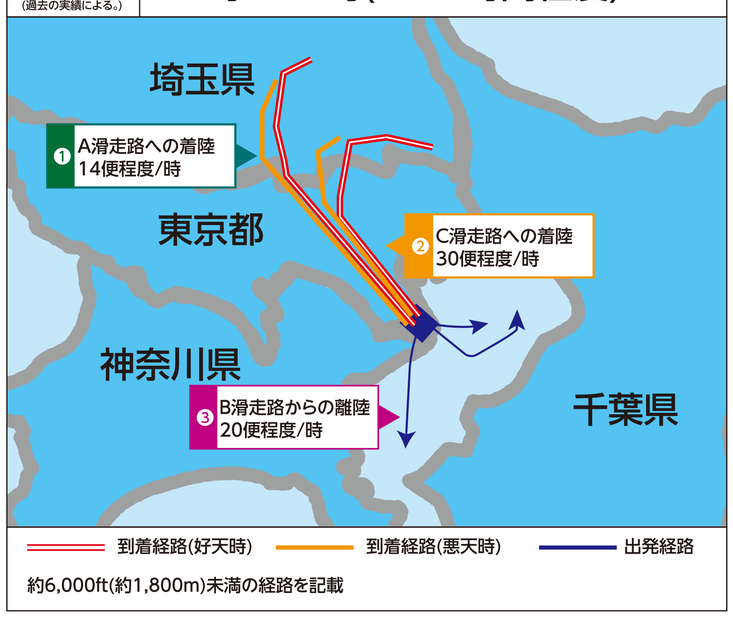
運用計画とは

国土交通省「羽田空港のこれから」より。新運用はあくまで増便のため。

新飛行経路と1時間当たりの運航予定便数

南風時
●年間約4割
(過去の実績による。)

[運用時間]
15時～19時(うち3時間程度)



約6,000ft(約1,800m)未満の経路を記載

「羽田空港がもっと便利に。世界がもっと身近に。」

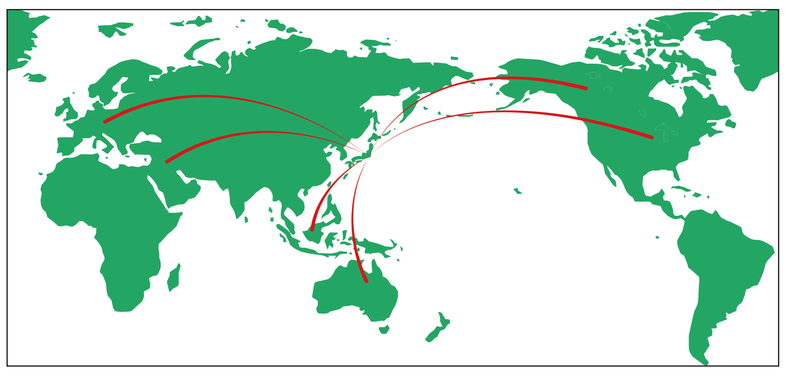
現在の羽田空港
国際線 1 日最大 80 便(※)

> 現在の就航先は以下 14の国・地域 (23都市) (※)
アメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ドイツ、韓国、中国、香港、台湾、タイ、シンガポール、フィリピン、ベトナム、インドネシア
(※) 2019年夏ダイヤの昼間時間帯の就航便数等

これからの羽田空港　国際線を更に50便増便へ

> 上記に加え、昼間時間帯に以下の国・地域に新規就航
・ロシア (4便)・オーストラリア (4便)・インド(2便)・イタリア(2便) ・トルコ(2便)・フィンランド (2便)・スカンジナビア(2便)
> アメリカ、中国については以下のとおり増便
・アメリカ (+24便)・中国 (+8便)
国際線発着枠が増え、羽田空港がさらに便利になります。

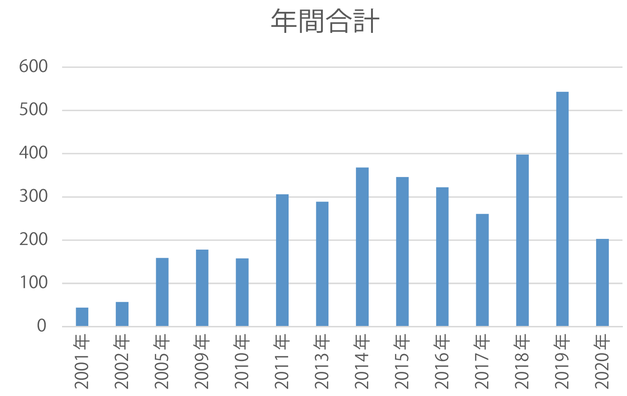
「国際線発着枠が増え、羽田空港がさらに便利になります。」



高まる懸念

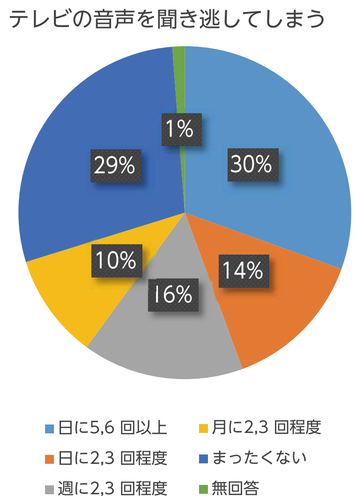
1．空港の過密化―ゴーアラウンド激増は空港が抱える危険要因蓄積の指標

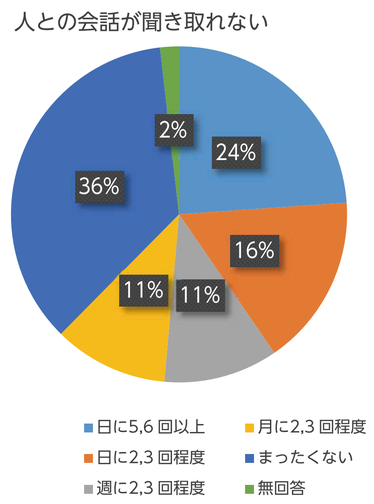
※運用便数の増大に応じてゴーアラウンド(危険回避)回数が激増。



2．騒音―紛れもなく生活と健康を圧迫

住民アンケート(「羽田空港増便問題を考える会」)





寄せられた意見の一例：・3月頃このルートが始まった頃は、約30秒に1回爆音です。すぐ真上を飛んでいるので騒音どころか爆音です。窓は閉めきりです。開けられません。この地区も やはり高齢者が多いので健康面が心配です。(羽田5丁目)／・夜中2:30~3:00amごろ、騒音はしないが家に振動が起こり、「地震か」と思い、目が覚める。地震波とは明らかに違って、一定のリズムの振動でおそらく航空機と思われるが証明できるものがなく、泣き寝入りするしかないのかと思う (羽田5丁目)／・二重窓にして、窓を閉めているのに、うるさくてTVも人の声もきこえない。これで窓を開けたら、犬も耐えられず吠える状態で、とても困っています。振動も あるのか、飛行機が通った時からしばらく頭がぼーっとします。(羽田6丁目)

3．落下物―そこにある危険

羽田空港着陸機部品紛失報告件数の推移(表)

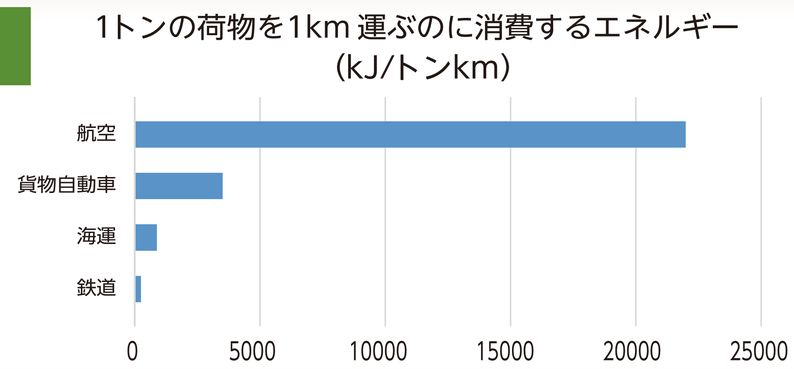
年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
部品落下件数	17	11	12	16	12	38	59	35

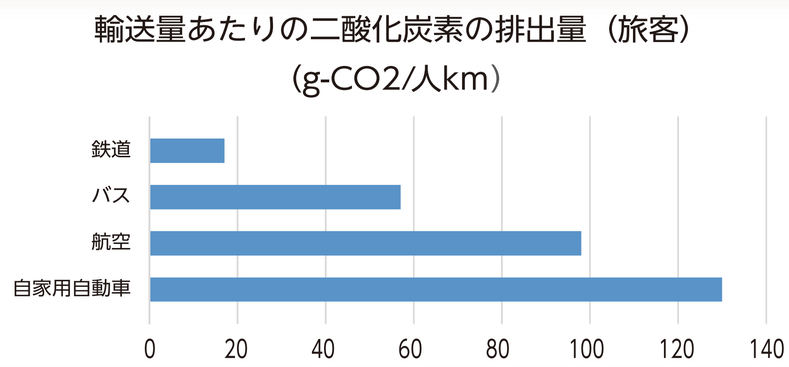
4．事故の危険―杞憂ではない

コロナ禍で異常運行が続いています。都心低空飛行、石油コンビナート上空低空飛行が設定されました。夏の午後のゲリラ豪雨や、ダウンバースト頻度激増も大きな懸念材料です

5．増便は気候危機対策に逆行行

絶対的要請の「ゼロカーボン」にも逆行。





結論はズバリ、「増便取り止め速やかに」

新運用の目的が「増便」とされている以上、増便がなくなれば新運用も不要だからです。しかも増便は、羽田空港の現在の過密状況では無謀であるだけでなく、今直面する気候危機の下ではそもそも継続できず、早晩の行き詰まりが明らかだからです。

団体紹介

1986年、チェルノブイリ原発事故に衝撃を受け、大田区の六郷土手で「原発のない社会を求める東京行動」が開催されました。ここに参加した大田区内の市民グループで消費者団体「大田ネットワーク」を結成。環境・人権福祉・教育・住民自治に取り組む区民の交流の場として活動しています。最近の大田区生活展では「大田清掃工場第2工場」「羽田空港の航空機排ガス汚染・騒音被害」「地震と原発被害」などの展示に取り組んできました。また、多摩川の農民訓練所のフィールドワークを経て「東京満蒙開拓団」を発行しました。(満蒙開拓団とは、旧満州国・内モンゴル地区への入植者をいう)情報交流を集約する月刊「おおたジャーナル」を1997年2月より編集発行しています。

団体名：大田ネットワーク　　大田ネットワークメールアドレス：oj.hiroba@gmail.com　　おおたジャーナルホームページ：https://ojhirobablog.wixsite.com/otajournal/